

『源氏物語』の「ことわり」

——その「もののあはれ」と近接する文芸的内実についての考察——

上 地 敏 彦

一

「ことわり」は、「道理」「教理」「法理」「論理」等を表し、美的理念たる「もののあはれ」と対峙する教戒的・観念的な内容を表す語とされている。それは、善惡是非を必ずしも基準としない人間的感情・心情とは対極にあると見做すのが、殊に本居宣長以降の通念である。確かに、例えば次の二例のように、その論の証左となるものは存する。

（左馬頭）「うちあひて勝れたらんもことわり、これこそは、さるべきこととおぼえて、珍らかなることと、心も驚くまじ。」

（帚木巻。岩波日本古典文学大系『源氏物語』、一―六十一頁）

「法の師の、世のことわり説き聞かせん所の心ちするも、かつはをかしけれど、かゝるついででは、おのゝ睦言もえ忍びとゞめずなんありける。」

（帚木巻。一―六十九頁）

両者ともに、感動・共感とは無縁な観念的「ことわり」である。前者は、「当然な（もつともな）こと（であり）」の意になるが、「心も驚くまじ」とあるように、感動とは全く無縁な理屈であり、無味乾燥な趣である。

しかし果たして、「ことわり」は「もののあはれ」の対義語としての論点しか見出だせないものなのだろうか。紅葉賀巻には、次のような用例が存する。

一日の、源氏の御夕影、ゆゑ、しう思されて、御誦経など、所々にせさせ給ふを、聞く人もことわりと、あはれがり聞ゆるに……（一―二七三頁）

詳しくは後述するが、光源氏に対する父桐壺帝の真情を「ことわり」ももつともなこととする周囲の者たちの理解は、「あはれが」る＝同情する心情を生起せしめているのである。このもつともだという理解は、言うまでもなく知的・観念的理解などではなく、親心というもののへの人情的理解であって、深い人間的共感ととらえることができる。それ故、「あはれ」の心情の生起へと自然に

つながっていくのである。この一例を見ても、「ことわり」を「あはれ」と対義語的に処理することが如何に短絡に過ぎるかが分かるであろう。

この「ことわり」については、相良亨氏が「日本の『理』」の中で、『万葉集』の「父母を見れば尊し 妻子見ればめぐし 愛し世の中はかくぞ許等相理云々」の長歌を引きつつ、「ことわり」はここでも状況における適切なあり方であるが、状況に適切なあり方としての「ことわり」は普遍的な内容を、条件付ではあるが獲得して行くことになる。……この歌自体が心情的状況を「ことわり」として規範化するものがある。「ことわり」という和語の意味内容が本論のような観点から徹底的に考察されることを期待してやまない。」⁽²⁾というように、文学的解明への期待を表しておられるが、未だ考察が皆無に等しい語である。殊に、「もののあはれ」との親近性の観点で「ことわり」を考察したものは皆無と言ってよい。『源氏物語』についていえば、紫式部の生きた世間において「ことわり」とされる内容のみならず、紫式部自身が世間に対して「ことわり」として提示する「状況に適切なあり方」や「心情的状況」をも含みもっているとすれば、その語に対する具体的な考察には、研究の現況に対して猛省を促すようなものがあり得るだろう。

『源氏物語』においては、「ことわり」の語は百九十四例も存する。その用例を具体的に検討すると、冒頭に触れた教戒的・観

念的な内容だけでなく、人間的な感情を基本に据えた条理を内実とするものが、多数にのぼるのである。そして必然的にこのことは、『源氏物語』における「ことわり」が「もののあはれ」と全面的に対峙する理念ではない事実、逆に親和性を有しているものの例がかなりの割合にのぼる事実を明示していると思われるのである。

結論的に言うと、『源氏物語』における「ことわり」は、その語の背景的・実態的内容の違いによって、次の二種類に大別できると考える。

I 教戒・観念的条理としての「ことわり」

前述のように「道理」「教理」「法理」「論理」等を表し、通常「ことわり」の典型とされて、「もののあはれ」と対峙的に取り沙汰されるものである。

II 人情・心情的条理としての「ことわり」

人情・心情的脈絡として当然そうだろう、無理もないという、心理的必然性を感じさせる内実を有するものである。『源氏物語』において実際に多用されており、小論において注目する、心情的な理解や人間的な共感を生み出す「ことわり」であり、「もののあはれ」と親和性の強いものが数多く存する。

以下に、紙幅の都合上、第八帖「花宴巻」までの巻々における具体的な用例の検証によって、教戒的・観念的な「ことわり」とは異なる人情・心情的条理としての内実をもつ「ことわり」の存

在を検証し、これと「もののあはれ」との接点について考察したい。

二

「ことわり」の語例は次のものが初出であるが、早くも教戒・観念的「ことわり」とは異質な性質が認められる。

1 あまたの御方々を過ぎさせ給ひつゝ、ひまなき御前わたりに、人の御心を尽くし給ふも、げにことわりと見えたり。(桐壺巻。一一二九頁)

帝が頻繁に桐壺まで足を運ぶことで、多くの夫人たちが氣をもち、苛立つ心情に対して全く「ことわり」だと評している。言うまでもないことだが、これは単なる嫉妬の念というより、夫人たちと帝との交流面における正常な慣習を破壊することへの当然の憤怒の念が根幹をなしているといった方が適切であろう。更に留意すべきは、夫人たちのその感情を「ことわり」だとするならば、その感情の高揚した結果として桐壺更衣の御蔭所詣でに対し「まさなきことゝも」(同巻。一一二九頁)を派生してしまう心情も「ことわり」の範囲に入ってしまうということである。この用例において作者は、正常な秩序を破られることに反発する人間の自然な感情を「ことわり」として共感を示している——、言い換えれば、共感すべきことと「規定」しており、同時に、普遍性を有するならば、たとえその感情の生み出す行為が穏やかならざるもので

あつても、それも「ことわりなる」こととして共感することを是とする可能性をも示唆している点で、注目に値する。この「ことわり」はちょうど、「もののあはれ」に善悪是非の観念が無縁であるのと同様な様相を示していると云えないだろうか。夫人たちの立場に立てば、不本意なる「まさなきことゝも」を派生させてしまうほどの悲嘆と憤怒の心情は、まさしく「あはれ」なるものである。更に言えば、桐壺更衣への帝の溺愛は人情的に「ことわり」なるものであるから、まさにこの一文は「ことわり」と「ことわり」の葛藤を内包しているということを見逃してはならない。

次も桐壺更衣に対する帝の寵愛の波紋に関与する例である。

2 七月にぞ、后、お給ふめりし。……弘徽殿、いとゞ御心動き給ふ、ことわりなり。

(紅葉賀巻。一一二九八—二九九頁)

中宮位を藤壺女御に越されてしまった弘徽殿女御の心の動揺を「ことわり」としているわけだが、これが一般的・普遍的な見方であることは、後統部分に、入内後二十余年の弘徽殿女御の立后を当然として「げに、春宮の御母にて、廿余年になり給へる女御を置きたてまつりては、ひき越したてまつり給ひがたきことなりかし」と、例の、安からず、世の人も聞こえけり(同巻。一一二九九頁)とあるところからも明白である。かように、弘徽殿女御の心情は「ことわり」なるものであるが、一方の桐壺帝の決

断も若宮への真情に基づいた深慮の点において「ことわり」なるものである。ここにもやはり「ことわり」と「ことわり」の狭間に苦悩する客観的・写実的な文芸表出が認められるのである。

ところで、「花宴巻」までの「ことわり」の用例は、右二例のように男女の問題におけるものが最も多い。以下、順次考察していく。

3 (源氏)「うちつけに、深からぬ心の程と見給ふらん、ことわりなれど、年ごろ、思ひわたる心のうちも、聞こえ知らせむとてなん、かゝる折を待ち出でたるも、さらに、浅くはあらじと思ひなし給へ」(帚木巻。一一九四頁)

4 (源氏)「あながちなるすき心は、更にならぬを、さるべきにや。げに、かくあはめられたてまつるもことわりなる心まどひを、身づからあやしきまでなむ」

(帚木巻。一一九六頁)

3・4ともに、光源氏と空蟬との関係における用例のうち、源氏の言葉における使用例である。自分の唐突な忍び入りに対して輕蔑の念を持つのは道理だとしていて、心情的条理への理解を表したのと言える。「死ぬばかりわりなきに、流る、まで汗になりていとなやましげなる」(一一九六頁)等の空蟬の痛々しい描写には、徹しく人間の煩悩を見つめる作者の姿勢が表れている。ただし、「げに、いとほしく」(一一九六頁)、「いと、あはれなり心苦しく」(一一九七頁)等というように、空蟬の悲嘆に共感

している点で源氏の「もののあはれを知る」心は描出されており、源氏の言における当二例の「ことわり」の語の使用も、その人格品位の設定上、重要なものといえる。

次の例は、空蟬の言葉を受けての源氏の感想である。

5 (空蟬)「……いとかう仮なる浮寝の程を思ひ侍るに、たぐひなく思ひ給へ惑はる、なり。よし今は、見きとなかけそ」とて、思へるさま、げに、いと、ことわりなり」

(帚木巻。一一九七―九八頁)

源氏の理不尽な行為を恨む空蟬の心情について、「げに、いと、ことわりなり」というように至上の同情を表現しており、これはまさしく当然の人間心理を踏まえつつ、同時にすぐれて「あはれ」的な共感である。故に、これは「げに、いと、ことわり」に、あはれなり」と同義であろう。それにしても、この共感は作者のものであるとともに源氏自身のものであるから、彼は空蟬の嘆きを「ことわり」と受け止めた結果、自らの行為がもたらした惨状に苦痛を感じ続けることになるわけで、「ことわり」の語は、情欲の業というものをより効果的に浮かび上がらせる役割を担って使われていることが分かるのである。

次の三例は、光源氏と若紫の關係に關与するものである。

6 「いかなる方の御しるべにかは。おほつかなく」と、聞こゆ。(源氏)「げにうちつけなりと、おほめき給はむも、ことわりなれど……」(若紫巻。一一九二頁)

7 「此のわか草の生ひ出でんほどのなほゆかしきを、似げない程とおもへるしも、ことわりぞかし。言ひより難き事にもあるかな。」(若紫巻。一一二〇二—二〇三頁)

8 京の御住みかを尋ねて時々御消息あり。おなじさまにのみあるもことわりなるうちに、此の月頃はありしにまざる物思ひに異事なくすぎ行く。(若紫巻。一一二〇八頁)

いずれも、若紫を引き取ることを決意した源氏の働きかけを心外とする尼上側の様子を、源氏の心内語において表したものである。源氏にとっては自己の所望の妨げとなる心情への筋道立った理解であり、貴顕ながらも相手方の「ことわり」に共感できる精神は、そのまま「ものあはれ」を知る精神と同義であると言える。又、「紫のゆかり」たる若紫への源氏の執着には心情的に「ことわり」なるものが存するから、これらにも「ことわり」と「ことわり」の葛藤が内包されていると言えよう。

次に、源氏と藤壺とのあやになる関係に関与する二例について考察を加えたい。

9 (藤壺)「世がたりに人やつたへんたぐひなくうき身をさめぬ夢になしても」

おほし乱れたるさまも、いと、ことわりにかたじけなし。(同巻。一一二〇六頁)

里下がりの折に王命婦の手引きによつて源氏が忍び入り、わりなき一夜を過ごさざるを得なかつた藤壺のつらい心情を「ことわり」

ととらえており、人情的条理としての「ことわり」である。源氏の思い自体も人情的に「ことわり」なるものであるから、ここでも「ことわり」と「ことわり」の葛藤という図式が内包されていると言える。又、こは「いと、あはれにかたじけなし」とあつても自然であろうが、しかし「ことわりに」の方が、突然出来した有り得べからざる事態への驚愕と慙愧の情、帝への恐懼の思い、罪と因果への恐怖の感情等の渾然となつた、当然の惑乱状態に対する共感を表すのにふさわしいであろう。「かたじけなし」とあるのは、そのような中宮の尊厳が損なわれた状態への同情の念であるが、「あはれ」の情を込めての表出であるのは言うまでもない。この「ことわり」は、「あはれ」の共感を自明のこととして、度し難き恩愛に由来するところの、悲劇的でわりなき苦悩一つ一つへの認識と共感を要求しているのである。このあやになる関係について、萩原広道が『源氏物語評釈』の中で、

……ことわりにたがへるあながちなるあひだの恋には殊に今一きはあはれのかきことある物なる故にことさらに云々と(本居宣長が)いはれたるは一わたりさることに似たれどそれも事がらによるべき也。かく皇胤のまされぬばかりの事をしもとりたて、書ずとも物のあはれのかきことはいくらもあらんを。殊更に此御かたぐのうへにしもか、れたるは別に心あるものに似たり。⁽³⁾

と説き、これについて工藤進思郎先生が、

「もののあはれ」という一元論ではどうてい読み解けない問題が、『源氏物語』に存することを示唆した言葉として注目される。¹¹

〔「国学者の源氏物語観——『もののまざれ』をめぐる——」〕

と説いておられるのは、順現象の長大で深長な文芸構想の評価の観点からも、まさに妥当であると考ええる。

10 「(若宮を) 上の、おほつかながり聞えさせ給ふを。まつ見たてまつりて、奏し侍らん」と聞え給へど、(藤壺)「むつかしげなる程なれば」とて、見せたてまつり給はぬも、ことわりなり。(紅葉賀。一一二八二頁)

以前「おどろくしう、さま異なる夢」(若紫巻。一一二〇七頁)の夢解きによつて藤壺が我が子を身ごもつたことを知っていた源氏が、右の場面において生誕したばかりの赤子の顔を見たがる、それを藤壺は良心の咎めによつて見せたがらない、だが、それは「ことわり」だ、というものである。しかし、直後に命婦が「見ても思ふ見ぬはたいかに嘆くらむこや世の人の惑ふてふやみ」(紅葉賀。一一二七三頁)というように、源氏の親心に対する同情の念を吐露している如くに、源氏が赤子を見たがるのは「ことわり」で、それを妨げるのは「ことわり」ならざることも言えるはずである。即ちここでも、「ことわり」と「ことわり」の葛藤が文芸的な核心をなしているのである。

次の二例は、源氏と末摘花の關係に關するものである。

11 (源氏)「物思ひ知るまじきほど、ひとり身をえ心にまかせぬほどにこそ、さやうにかゝやかしきも、ことわりなれ。なに事も、思ひしづまり給へらんと思ふにこそ。」

(末摘花巻。一一二四五頁)

12 (大輔命婦)「かぎりなき人も、親などおはして、あつかひ、後見聞こえ給ふほどこそ、若び給ふもことわりなれ。かばかり、心細き御有様に、なほ、世をつきせず思はゞかるは、つきなうこそ」(同巻。一一二四七頁)。

物心もつかない子供や、親の庇護のもとで我が身の処し方も知らないような娘の場合は、恥ずかしがるのもつともであるということから、この「ことわり」も心理的必然性を意味しており、教条的な道理の意味合いでは決してない。

次は、同じ末摘花巻の、源氏の美に対する命婦の感想中の用例である。

13 (源氏の微笑を見て、命婦は)「われも、うち笑まる、心地して、わりなの、人に恨みられ給ふ御齡や。おもひやり少なう、御心のま、ならんもことわり」と思ふ。

(末摘花巻。一一二五四頁)

女性關係において「おもひやり少なう」とか、「心のまま」という源氏の利己的で否定されるべき有様に対して、それも美しさゆえ「ことわり」だとしていることに留意したい。ここから、「ことわり」が教戒・観念的道理に反する内実を表象することが有り得

るということが確認できるが、それとともに、この物語における唯美主義的な精神基盤を垣間見ることのできるのである。

源氏と葵上の関係においても「ことわり」の用例が存する。

14 「二条院には、人むかへ給へるなり」と人の聞えければ、(葵上は)「いと、心づきなし」とおほいたり。うち／＼の有様は知り給はず、さも思さむはことわりなれど、心うつくしく例の人のやうにうらみ給はゞ、我もうらなくうち語りてなぐさめきこえてん物を、思はずにのみとりない給ふ心づきなさに、さもあるまじきさびごととも、出で来るぞかし。(紅葉賀巻。一―二七五頁)

若紫を二条院に引き取ったことに対して、葵上が「いと、心づきなし」と感じたのは「ことわり」ではあるが、しかし……という文脈であり、葵上の冷厳な態度ゆえに浮気をすることも「ことわり」だとする作者のとらえ方が示されている、という見方も可能である。「ことわり」と見られるものの中に「ことわりならざる」要素が含まれ、反対に「ことわりならざる」ものの中に「ことわり」が存するということもあるのである。又、やはり「ことわり」と「ことわり」の対立という構図でとらえることもできよう。

次は、源氏と臘月夜との関係を描く中に登場する用例である。

15 うき身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば問はじとや思ふ

といふさま、艶に、なまめきたり。「ことわりや。……」(花

宴巻。一―三〇七頁)

源氏が名告りを求めたことに対して、名告らないから探し求めないということなら誠意が疑われるという臘月夜の切り返しを「ことわり」としていて、これにはかなり理知的な表出の中に女性の真情が含まれていると見ることができよう。

以上、男女の關係に「ことわり」の関与する例を順次考察した。次の二例は、肉親の情に關与する用例である。

16 (桐壺更衣の母君)「畏き仰せ言をたび／＼うけたまはりながら、みづからは、えなん思ひ給へたつまじき。若宮は、いかにおもほし知るにか、まゐり給はんことをのみなむ、思しいそぐめれば、ことわりに、悲しう見たてまつり侍る」

(桐壺巻。一―三六頁)

桐壺更衣亡き後の母君と鞠負の命婦との對話部分であるが、若宮が内裏の父帝に会いたがっている心情を「ことわり」と認識しながらも、更衣母自身にとつてその心情は別れにつながるところから、悲しみを生じているのである。換言すれば、更衣母は自身にとつて「ことわり」である別離の悲しみにもかかわらず、若宮の心情を「ことわりなる」こととして共感しているわけである。故にこの「ことわり」は、親に対する子の情を内容としているとともに、孫に対する祖母の愛情をも内包していて、極めて人情条理的なものであり、そしてその表象する全体像には「あはれ」の印象が濃いと言えよう。

17 (桐壺帝は) 一日の源氏の御夕影ゆ、しう思されて、御誦

経など所々にせさせ給ふを、聞く人も「ことわり」とあはれ
がり聞ゆるに、春宮の女御は「あながちなり」と、にくみ聞
え給ふ。(紅葉賀巻。一一二七三頁)

冒頭部でも触れた用例である。「おもしろくあはれるに、帝涙
を拭ひ給ふに、上達部・皇子たちも、みな泣きたまひぬ。」(同巻。
一一二七一頁) というように、紅葉賀の宴の試楽において見聞す
る人々に感涙を催させた源氏の「青海波」の舞の無欠の美に対し
て、空虚思想の上から不吉なこととして魔除けの祈禱をさせる帝
の心情を人々がもつともだとしており、この「ことわり」は親の
子に対する真情を表している。源氏の十全さへの共通の感銘を背
景にした、愛し子の恙無き前途を願う親の真情への共感が、人々
の「あはれがる」心情を生起せしめているのである。このことか
ら、「ことわり」あはれ」というように、「ことわり」と深い人間
的な情念との連係が厳存する事実を確認するのである。

ところで、帝の折禱は、実子の春宮を溺愛する母として源氏を
憎む弘徽殿女御からすると「あながち」なる——自分の気持ちを
無視した無理やりな行爲ということになる。女御がそう思い、恨
むのは母親の心情として当然だと言える。そうすると、その母性
愛を基準にすれば「あながちなり」と思う女御の心情も又「こと
わり」であり、その嘆きに接する側近の者たちも又「あはれがり
聞こゆる」情を生じたと考えるべきである。「ことわり」には、

それに対峙する「ことわり」の存在も有り得るのである。この一
段から、人間心情を基準にする「ことわり」の相対的・流動的で
柔軟な本質を知ることのできるであろう。次の例は、主従関係
に關するものである。

18 (右近)「煙にたぐひて、したひ参りなん」といふ。(源氏)

「ことわりなれど、さなん、世の中はある。別れといふもの、
悲しからぬはなし。とあるも、かゝるも、同じ命の、限りあ
るものになんある。……」(夕顔巻。一一六一頁)

変死した夕顔の葬送後、主の死への悲嘆のあまり、今にも後を追
いかねない様子の右近を慰める源氏の言である。この「ことわ
り」は、主人への誠実な情愛に対する共感が根本ではあるが、し
かし、それは忠義の方面の封建的な意味合いを有するものでは決
してない。その点において、ちようと親の子に対する情や、親友
に対する情等、極めて親しい者の死への嘆きと同質の心情と言っ
てよい。更に興味深い点として、「さなん、世の中はある」以下
の言が、世間常理的、或いは仏教無常観的な観念を背景にしたも
のであり、やはり「ことわり」を言い表している点である。この
ことは、観念的条理としての「ことわり」でもって、右近の「こ
とわり」なる嘆きの心情を縮念に昇華させようとするものと言え
る。このことによつても、観念的条理としての「ことわり」とは
全く異質の人情的条理たる「ことわり」の存在が明らかであると
ともに、それが「あはれ」に近接する性質をもつことを知るの

の

て

上
省

。

である。又、この一文も、「ことわり」と「ことわり」の葛藤という図式でとらえることもできよう。

三

以上、第八帖花宴巻までにおける「ことわり」の具体的な用例につき、その人情・心情条理的な様相の際立ったものを取り上げて考察した。その割合は、《花宴巻までの》全二十四例中十八例―四分の三もの割合にのぼる。このように、「ことわり」には、教戒的・観念的な内容を伴うものだけでなく、人間的共感・「あはれ」の感懷を伴う用例が明らかに多数確認できるのである。

ここで、「ことわり」における人情・心情の条理としての「ことわり」と、教戒的・観念的条理としての「ことわり」の相違を表示すると、次のようになるう。

		【人情・心情の条理】
(表象内実)	当然の感情・心理・動機	教条・道徳・秩序・真理
(派生情緒)	共感的感情 「あはれ」的情緒	信仰的情緒・道徳的情緒 抑圧的情緒・知的情緒

(※教戒・観念的条理の詳細については紙幅の都合上省略した。)

人情・心情条理的な「ことわり」を内容的に分類すると、次のようになる。

- ① 男女の情関係……1・3・4・5・7・8・9・10・11・12・13・15・17・18
 - ② 肉親の情関係……2・14
 - ③ 従者の情関係……6
 - ④ 唯美的情関係……13
- ①③ともに十分に教戒的な表象になり得る要素をもつものであるが、考察した用例は全て人情・心情に根差した内実を有しており、源氏と藤壺・空蟬との関係に関与する用例をはじめ、どれも文芸的な効果に深く関与するものであった。④の13の例などは、美が道徳に優先するという、文芸的に象徴的な意味合いすら明示していた。

更に、「ことわり」と「ことわり」の葛藤という、基盤とする心的状況の相違がもたらすところの情と情とのせめぎ合いを内包し、まさに文芸的な葛藤そのものを表象する例も多く認められた(1・6・7・8・9・10・15・16・17)。

本居宣長は、「盛者必衰、会者定離の理り……煩惱即菩提の理り」は一向によりもつかぬことにて……⁽⁵⁾「紫文要領」巻下、「すべてあやにくに物の理りを立てむとかまへて作るゆゑに、うち聞くに賢くはあめれど、憎き方まじりて……」⁽⁶⁾「石上私淑言」巻三二等というように、文学の教戒・教条的な在り方を否定し、「も

のあはれ論を主張するための便宜上、「ことわり」をアンチテーゼの位置に据えたのであった。しかし、奇しくも宣長自身の言説の中に、「心あらん人（『作者』は感ずべき理）を知らせ、それを感じぬ人の口惜しく心なきことを強くいへり。されば物の哀れを知らぬ人は虎狼にも劣れることを知るべし」（『紫文要領』巻上）とあるように、〈物の哀れを知る』感ずべき理を知る』ということにもなるのである。

紙幅の都合上、詳述できないが、他に教戒・観念的条理のみを表す語として「道理」がある。用例のみを示すと、「道理をも失はせ」（桐壺巻。一四二頁）、「世の道理を思ひとりて」（帯木巻。一八三頁）、「世間の道理なれど」（若紫巻。一二三頁）、「大方の道理にても」（賢木巻。一四〇五頁）等である。漢語で純然たる思想語である「道理」とは異なり、「ことわり」は本来「事を割る」ことで、実社会・実生活に密着した「善悪」「理非」「当・不当」の判定に関わる用語である。「ことわり」の判定基準というものが法令や教理・儒教道德といった絶対的な規範だけなら、その使用は極めて限定されたものであったろう。しかし例えば、現代でも日常的に「それは無理だ」「道理でおかしいと思った」とか、「それは間違っている」「それは正しくない」等という時、その判断の基準には絶対的なものはむしろ少ないが、「ことわり」も同様である。同じ人間としての、又は、文化的・精神的な土壌を共有する者としての「当然の共感」が判定基準となることも当

然あるだろう。要するに、それ自体は「ものの筋道」に過ぎない「ことわり」において、その内実たる「当然のこと」が人間心情の筋道として人間的・普遍的にそうなのか、教義的・論理的にそうなのかという違いが重要であり、前者を前提とするときに、必然的に「ことわり」の認識は、即、人間的共感や「もののあはれ」の情緒の源泉となるのである。物語作者が一体どういことを肯定的に「ことわり」と表象しているのかについて考察することは、その文芸的本意を的確に知る上で必要不可欠なことであると言える。（了）

注

- (1) 以下、『源氏物語』の本文引用は全て、山岸徳平氏校注の岩波日本古典文学大系『源氏物語』一に拠り、「」と略記する。尚、引用文中の「」や（ ）・読点は、適宜省略する。
- (2) 岩波書店『文学』昭和六十二年五月号、八十一頁。
- (3) 大正二年皇學書院『訂正再版 国文注釈全書』一、三一一—三二頁。尚、引用原文中の句点は、文末以外のものは省略した。
- (4) 桜楓社『菊田茂男教授退官記念 日本文芸の潮流』（平成六年一月）五二—頁。
- (5) 新潮日本古典集成『本居宣長集』（日野龍夫氏校注）昭六、一七三頁。
- (6) 注5の書、四五〇—四五二頁。
- (7) 同、一三三頁。

※この小論は、工藤進思郎先生から博士後期課程においてご教示賜ったもののごく一部を基にして成ったものです。

先生には、故藤岡常夫先生ご退官後の修士課程二年目（昭和五十一年度）から今日に至るまで変わることなく丁寧親身なご指導を賜り、私に我が人生最大の恩師として言いようのない尊敬と感謝の念を抱いて参りました。この機会に衷心より謝意を表させて頂きます。

（かみち としひこ） 別府大学短期大学部助教授

研究室受贈図書雑誌目録Ⅰ

（平成十三年一月～十二月）

《単行本》

日本語日本文学の研究（前田富祺先生退官記念論集刊行会）

広島県戦後国語教育実践研究文献目録 第一集（安田女子大学言語文化研究所）

広島女学院大学公開講座論集 旅と日本文学（広島女学院大学日本語日本文学科）

安田文芸論叢 研究と資料（安田女子大学日本文学会）

忘れえぬ女性 松尾聰遺稿拾遺と追憶（松尾聰 八洲子 光）

《雑誌》

愛知教育大学国語国文学報（愛知教育大学国語国文学研究室） 五

九 愛知教育大学大学院国語研究（愛知教育大学大学院国語教育専

攻） 九

愛知淑徳大学国語国文（愛知淑徳大学国文学会） 二四

愛知大学 国文学（愛知大学国文学会） 四十

青山語文（青山学院大学日本文学会） 三一

旭川国文（北海道教育大学旭川校国語国文学会） 十六

霞（山崎勝昭） 七

九 跡見学園女子大学国文学科報（跡見学園女子大学国文学科） 二

岩大語文（岩手大学語文学会） 八

岩手郷土文学の研究（岩手郷土文学研究会） 二

宇都国語論究（宇都宮大学国語教育学会） 十二

歌子（実践女子短期大学日本語コミュニケーション学科） 九

愛媛国文と教育（愛媛大学教育学部国語国文学会） 三四

王朝細流抄（安田女子大学大学院古代中世文学研究会） 五

王朝文学研究誌（大阪教育大学大学院王文学研究会） 十二

大阪青山短大国文（大阪青山短期大学国文学会） 十六、十七

大阪樟蔭女子大学 日本語研究センター報告（大阪樟蔭女子大学

日本語研究センター） 九

大阪樟蔭女子大学論集（大阪樟蔭女子大学） 三八

大谷女子大國文（大谷女子大学日本語日本文学会） 三二

大妻国文（大妻女子大学国文学会） 三二

大妻女子大学紀要―文系―（大妻女子大学） 三三